

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02746

研究課題名（和文）日本人の英語発話モデルの構築 話ことばの日英対照研究を基に

研究課題名（英文）A Speech Model for Japanese Learners of English Based on Contrastive Studies of Japanese and English

研究代表者

植野 貴志子（Ueno, Kishiko）

東京都市大学・共通教育部・教授

研究者番号：70512490

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中学英語教科書の検証をもとに、現行の英語教育において学習者の母語である日本語と目標言語である英語の隔たりをいかに橋渡しするかという問題が見過ごされていることを指摘した。そして、話ことばの日英対照研究から得られた「日本語は、具体のことば」、「英語は、抽象のことば」という発話モデルに基づき、日本語と英語の根源的な異なりを橋渡しする英語教育に向けての提言を行った。さらに、日英語の発話モデルを用いた教材を作成し大学等の授業で活用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日英対照研究の知見を日本語と英語の根源的な異なりを橋渡しすることを主眼とした英語教育の開発に活用するものである。この試みは、日英対照研究の英語教育への応用を促進するとともに、学習者が日本語と英語の異なりを認識し、英語に対する苦手意識を軽減させる助けとなる。本研究の成果は、日本語母語話者のアイデンティティを保ちながら英語を使うことができる人材の育成に資するものである。

研究成果の概要（英文）：This study examined junior high school English textbooks in Japan and found that current English education fails to address a fundamental difference between learners' native language, Japanese, and the target language, English. Contrastive studies of Japanese and English have demonstrated "the concreteness of Japanese" and "the abstractness of English." Therefore, we propose an approach to English education that appropriately bridges the fundamental differences between Japanese and English and have created teaching materials to help students better understand the fundamentals of the two languages.

研究分野：社会言語学、語用論

キーワード：英語教育 日英対照研究 話ことば 発話モデル 具体のことば 抽象のことば

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

十数年来、文科省主導による「『英語が使える日本人』の育成」、「国際共通語としての英語力向上」を目標とした英語教育改革が行われてきた。これを受けて、大学英語教育においてはグローバル・スタンダードの英語検定試験や CEFR 基準に基づいたカリキュラムの導入が進められている。しかしながら、こうした動きが加速する一方で、大学英語教育の現場では、初歩的な段階でつまづき、英語に対する苦手意識をもった学生が少なからず見受けられる。学生の英語に対する苦手意識の大部分は、日本語と英語の根本的な異なりが適切に理解されていないことに起因するのではないかと推測されるものの、その異なりを分かりやすく説明した教材は見当たらない。学習指導要領でも、中学校での文法から高等学校でのコミュニケーション能力の習得へと段階を踏んだ項目が挙げられているが、学習者の母語である日本語と学習言語の英語の隔たりをいかに克服するかという観点は見過ごされている。こうした問題への取り組みとして、日本語と英語の根源的な異なりを学習者に意識化させるための英語教育の開発が求められる。

2. 研究の目的

本研究は、話ことばの日英対照研究の成果に基づいて日本語および英語の発話モデルを提示し、それをもとに日本語と英語の根源的な異なりを橋渡しすることを主眼とした英語教育の方法を提案することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 日本語および英語の発話モデルの検討

既存の日英対照研究の成果を考察する。また、日英語自然発話コーパスをデータとして、コミュニケーション・レベル、文レベルを含む幅広い事象を取り上げて日英対照分析を行う。これらを基礎資料として日本語と英語の発話モデルを抽出する。

(2) 英語教育の問題点の把握

文科省検定済英語教科書において基本項目がどのように導入され説明されているか、日本語と英語の隔たりがどのように扱われているかを検証し、問題点を明らかにする。

(3) 日本語と英語の発話モデルを用いた教材の作成

日本語と英語の発話モデルをもとに、学習者に日本語と英語の根源的な異なりを意識化させるための教材を作成し、実際の授業で使用する。学生からのフィードバックを得て改善を重ねる。

4. 研究成果

主要な研究成果として、研究代表者・研究分担者の共著による口頭発表および論文、さらにそれらに基づく英語授業の実践が挙げられる。

(1) “I” と “you” が、なぜ言えないのか？

日本英語教育学会・日本教育言語学会第 49 回年次研究集会（2019 年 3 月）において口頭発表「日本人のための英語発話モデルの開発：“I” と “you” をどう教えるか」を行い、中高英語教員や研究者より有益なフィードバックを得た。これをもとに、論文「“I” と “you” が、なぜ言えないのか？ 日英語の根源的異なりの一考察」(2020 年 3 月、『言語学習と教育言語学：2019 年度版』)を執筆した。

一人称代名詞 “I” と二人称代名詞 “you” は、中学 1 年生用英語教科書の冒頭で導入される基本の “き” であるが、日本人の英語学習者にとって必ずしも容易いものではない。上の口頭発表および論文では、“I” と “you” について、日本語の相当表現「私」と「あなた」と比較しつつ、その言語的特徴を考察したのち、中学英語教科書における “I” と “you” の導入に係る問題点を指摘した。そして、英語教育においては、日本語と英語の異なりを明確に提示し、学習者に両言語の異なりを意識化させ、その上で “I” と “you” の使用を習慣化させるための訓練までを盛り込んだプログラムをデザインすることが必要であることを論じた。

学習者が意識化すべき日本語と英語の異なりとして ~ を挙げた。

“I” と “you” とは、自分と相手の相互的關係システム I You を形づける「虚の記号」である。それに相当するものは日本語にはない。

日本語には自分と相手を指す多様な語があり、それらは自分と相手の具体的な関係や状況に応じて使われる。

“I” と “you” は、主語の位置に置かれ、義務的な文構成要素である。

日本語では、自分と相手を指す語は義務的な文構成要素ではない。

英語では、I You の相互的關係システムに基づいて “I” と “you” を交替しながら対話が行われる。

日本語には I You の相互的關係システムに相当するものはない。そのため、英語で対話するとき、自分を “I” として確立し、相手 “you” と対峙して話す心構えが必要である。

(2) 具体のことば vs. 抽象のことば

日本英語教育学会・日本教育言語学会第51回年次研究集会(2021年2月)において口頭発表「現場のことば vs. 脱現場のことば 日本語と英語の基本理解と英語教育」を行った。フロアからのフィードバックを受けて考察を深め、論文「具体のことば vs. 抽象のことば:日本語と英語の基本理解と英語教育」(2022年3月、『言語学習と教育言語学:2021年度版』)を執筆した。

中学1年生用英語教科書において、一人称代名詞“I”、指示詞“this, that, it”、動詞の過去形“verb-ed”はそれぞれ「私」、「これ・あれ・それ」、「た」に対応するものとして導入されている。これらは、英語、日本語において、自己、空間、時間を構成する基本表現であるが、そこには英語と日本語のものの見方の異なりが潜んでいる。つまり、“I”、“this, that, it”、“verb-ed”は事象を抽象化、概念化して捉えるものの見方、「私」、「これ・あれ・それ」、「た」は事象を具体的、即事的に捉えるものの見方を備えている。これらの議論をもとに、「日本語は、具体のことば」、「英語は、抽象のことば」というものの見方の違いに基づく日本語と英語の発話モデルを提示した。さらに、英語教育の改善に向けて、以下の方略を提案した。

第一に、文部科学省の学習指導要領に日本語と英語のものの見方の違いに関する項目を取り入れる。第二に、その学習指導要領に基づいて教科書を作成する。第三に、その教科書を教育現場で使って日本語と英語のものの見方の違いに関する項目を教える。

(3) 研究成果の英語授業への活用

現行の英語教育において、“I”、“you”、“this, that, it”、“verb-ed”は、それぞれ「私」、「あなた」、「これ・あれ・それ」、「た」に対応するものとして導入されている。これらの基本表現にこそ、英語と日本語の根源的な異なりが潜んでいる。それにもかかわらず、英語教育では、どの段階においても、日本語と英語がどのように違うのかということに触れていない。

このような教育を受けてきた高校生、大学・大学院生に対して、“I”、“you”、“this, that, it”、“verb-ed”が「私」、「あなた」、「これ・あれ・それ」、「た」とどう違うのか、なぜ日本語話者にとって英語が難しいのか、といったテーマを取り上げ、「日本語は、具体のことば」、「英語は、抽象のことば」という発話モデルを用いて、日本語と英語の根源的な異なりを認識させる試みを行った。学生の感想の一部を紹介する。

(高校生)

- ・学校では習わなかったこと、英語と日本語の違いを理論的に説明してもらったので、英語のルールが日本語の文法と比較できて、とてもすんなり理解できた。
- ・もともと英語が好きなので、日本語と英語の違いを知ることができて興味を持った。将来かならず英語を話せるようにしたいので、今回学んだことをいかして習得していきたい。“this, that, it”の使い方が一番興味深かった。
- ・英語のテストで日本語を英語にしなさいとか、その逆パターンの問題とかがあるが、英語と日本語の大きな違いがあるとすると、実はすごく難しい問題になってしまうと思った。なぜ英語を勉強するとき日本語との大きな違いを教えてくれないのか。

(大学院生)

- ・今回のようにはっきり整理されて教えられたのは、はじめてです。文法にしても、こういうものだからと教えられ、自分の頭で納得がいかないまま終わってしまうことが多かった気がします。特に、時制はすっきりわからないまま終わってしまった記憶があります。(略)英文を見るだけで「無理!」という拒否反応があったのですが、わかりやすく体系立てて教えていただいたことで、英文を読んでみようという気になっています。というわけで、いま、ラダーシリーズの「I am a cat. (吾輩は猫である)」を読み始めていますが、吾輩=I なのですね。「吾輩」というだけで物語のスタンスや背景がわかる具象的表現の日本語の違いに驚いています。あ、こういうことか!と思いました。

上の記述から、日本語と英語の根源的な異なりを学校で学んでこなかった学生が、それを知ることによって英語の理解が促されることを自覚した様子が窺える。上記のほかにも、日本語と英語の違いを認識することで英語学習へのモチベーションを新たにしたり、といった感想が寄せられた。

日本語母語話者のアイデンティティを保ちながら、国際共通語である英語を使うことができる人材を育成するためには、本研究で議論した日本語と英語の根源的な異なりを橋渡しする英語教育を導入することが急務である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Ueno, Kishiko	4. 巻 58
2. 論文標題 Co-creation of merging discourse in conversaiton between friends	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 英米文学研究	6. 最初と最後の頁 27-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植野貴志子・井出祥子	4. 巻 -
2. 論文標題 具体のことば vs. 抽象のことば 日本語と英語の基本理解と英語教育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語学習と教育言語学 2021 年度版	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 植野貴志子・井出祥子	4. 巻 -
2. 論文標題 “I” と “You” が、なぜ言えないのか？ 日英語の根源的異なりの一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語学習と教育言語学：2019 年度版	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 植野貴志子	4. 巻 1(1)
2. 論文標題 会話におけるストーリーの共創	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 共創学	6. 最初と最後の頁 51-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hanks, William F., Sachiko Ide, Yasuhiro Katagiri, Scott Saft, Yoko Fujii, and Kishiko Ueno	4. 巻 145
2. 論文標題 Communicative interaction in terms of ba theory: Towards an innovative approach to language practice	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2019.03.013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 植野貴志子	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 日本人とアメリカ人の会話マネージメントはなぜ異なるのか 教師と学生による会話の日英対照	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 64-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 植野貴志子	4. 巻 36(4)
2. 論文標題 日本人の聞き手行動 「融合的談話」を事例として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 116 - 127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出祥子	4. 巻 36(6)
2. 論文標題 敬意表現と日本文化 「場の考え」からのアプローチ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 2 - 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 植野貴志子
2. 発表標題 融合的談話と場 共鳴することばとからだ
3. 学会等名 研究会「言の葉とももの理 言語学と量子哲学における場の思想」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井出祥子
2. 発表標題 なぜ言語研究に場の概念が必要か
3. 学会等名 研究会「言の葉とももの理 言語学と量子哲学における場の思想」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ueno, Kishiko
2. 発表標題 Co-creation of merging discourse in Japanese conversation: An interpretation using the notion of dual-mode thinking
3. 学会等名 The International Pragmatics Conference, Switzerland (online) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ide, Sachiko
2. 発表標題 Rethinking linguistic relativity from the perspective of ba theory
3. 学会等名 The International Pragmatics Conference, Switzerland (online) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植野貴志子・井出祥子
2. 発表標題 現場のことは vs. 脱現場のことは 日本語と英語の基本理解と英語教育
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会 第51回年次研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植野貴志子
2. 発表標題 日米女子大学生の言語行動と自己対社会観 「ミスター・オー・コーパス」をデータとして (ワークショップ「社会言語科学における対照研究の可能性」)
3. 学会等名 第44回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植野貴志子
2. 発表標題 会話における共創の諸相 「融合的談話」を事例として
3. 学会等名 計測自動制御学会システムインテグレーション部門共創システム部会 第34回共創システム部会研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ueno, Kishiko
2. 発表標題 Why teachers ask more questions than students in dyadic conversations: An interpretation of wakimae utterances using ba-based thinking
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference, The Hong Kong Polytechnic University, June 11, 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ide, Sachiko
2. 発表標題 Toward a theory of communicative interaction in terms of ba theory - Primary ba and interiority -
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference, The Hong Kong Polytechnic University, June 11, 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ide, Sachiko
2. 発表標題 Rethinking politeness in terms of ba theory: Speaking as part of a whole
3. 学会等名 1st International Symposium on East Asian Pragmatics, The Dalian University of Foreign Languages, September 20, 2019. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ide, Sachiko
2. 発表標題 Language and communicative interaction in terms of ba theory: In search for sensibilities and sensitivities in communication
3. 学会等名 International Symposium on Invectivity: A New Paradigm in Cultural Studies? Waseda University, Tokyo, April 1, 2019. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 植野貴志子・井出祥子
2. 発表標題 日本人のための英語発話モデルの開発：“I”と“you”をどう教えるか
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第49回年次研究集会(早稲田大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 植野貴志子
2. 発表標題 二者会話におけるストーリーの共創：うなずきと相互ひきこみ発話
3. 学会等名 第2回共創学会年次大会(東洋英和女学院大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 植野貴志子
2. 発表標題 教師と学生の相補的關係性における役割志向の発話 自己の二領域性のはたらき(ワークショップ「場の語用論の試み 日本語のインテュイションに基づく解釈」)
3. 学会等名 日本語用論学会第20回大会(京都繊維工業大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 植野貴志子
2. 発表標題 初対面会話における役割志向のわきまへの発話 主体と場の相互誘導合致
3. 学会等名 共創学会第1回年次大会(早稲田大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 植野貴志子
2. 発表標題 融合的談話の共創：共振する身体と発話
3. 学会等名 第1回共創学研究会(早稲田大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ide, Sachiko
2. 発表標題 How wakimae works: An explanation in terms of ba based thinking
3. 学会等名 The 15th International Pragmatics Conference, Belfast, UK (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ide, Sachiko
2. 発表標題 Eloquence and persuasion are not valued by speakers of Japanese: Language and communicative interaction in terms of ba based thinking
3. 学会等名 Fyssen Colloquium ' Translation, Multimodal Interaction and Context: Cross-disciplinary perspectives ', Paris, France (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井出祥子
2. 発表標題 場の語用論は何故必要なのか (ワークショップ「場の語用論の試み 日本語のインテュイションに基づく解釈」ディスカッサント)
3. 学会等名 日本語用論学会第20回大会 (京都繊維工業大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ide, Sachiko
2. 発表標題 Ba based thinking and unconscious dimension in communicative interaction
3. 学会等名 The Fifth International Workshop on the Linguistics of Ba, Waseda University (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 植野貴志子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 25
3. 書名 「日本語と英語における自己の言語化 「場所」に基づく一考察」『場と言語・コミュニケーション』 (岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子(編))	

1. 著者名 井出祥子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 29
3. 書名 「場の言語学・語用論とその展開 言語と文化の関わりのメカニズムを求めて」『場と言語・コミュニケーション』(岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子(編))	

1. 著者名 Saft, Scott, Sachiko Ide, and Kishiko Ueno	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 22
3. 書名 Emancipatory Pragmatics, The Cambridge Handbook of Sociopragmatics (M. Haugh, D. Z. Kadar, and M. Terkourafi (eds.))	

1. 著者名 井出祥子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 36
3. 書名 「場の語用論 西欧モデルを補完するパラダイム」『場とことばの諸相』(井出祥子・藤井洋子(編))	

1. 著者名 井出祥子・藤井洋子（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 291
3. 書名 『場とことばの諸相』	

1. 著者名 植野貴志子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 22
3. 書名 「聞き手行動の『場の理論』による解釈」『聞き手行動のコミュニケーション学』（村田和代（編））	

1. 著者名 植野貴志子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 5
3. 書名 「聞き手行動研究の可能性」『聞き手行動のコミュニケーション学』（村田和代（編））	

1. 著者名 Ide, Sachiko	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 -
3. 書名 Introduction to “The logic of politeness; or, Minding your P's and Q's” Context Counts: Papers on Language, Gender, and Power (Laurel Sutton (ed.))	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	井出 祥子 (Ide Sachiko) (60060662)	日本女子大学・文学部・研究員 (32670)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関